

れているが、他面そこでは父と共に子が語り、歴史内で人に恵み人を救う神が伝えられているというのである。このようにバルトにあって Ex. は神秘（超越的神）とするし（キリスト）を統合した具体的神学の根底をなしている。

以上の如く、本書は神名エフィエーが、愛智の途に立つ人びとに、様々な思索と生の地平を開示してきた歩みを概説している。それらの地平は人間学、神学、神秘主義、意志哲学、敬虔主義などを包括したもので、中世哲学が孕む可能性と思索の沃野を示してくれているともいえよう。

それと共にこの神名は、存在が永遠、必然、無限、不動などの三人称的意味連関から脱自して、今ここで「わたし」に現成し問いかけていることの自覚を新たにさせてくれるものである。

Drago Pintarič: *Sprache und Trinität. Semantische Probleme in der Trinitätslehre des hl. Augustinus.*

Salzburger Studien zur Philosophie
Salzburg-München, Verlag Anton Pustet 1983, 162 S.

森 泰 男

三一論 (Trinitätslehre) は中世哲学にとっても基本的な問題の一つである。実体 (substantia) と関係 (relatio) の問題は、アリストテレス哲学とも関連して大いに議論されたところである。拙稿、「アウグスティヌス、『三位一体論』における《関係》の問題」においても述べたように、東方の三一論は従属説 (Subordinationismus) に傾きやすかった。その背後に、新プラトン主義の影響を見ることが許されるであろう。

それに対して、アウグスティヌスは三一論を根本的に考え直そうとする。すなわち、彼は神における語りに注目するのである。アウグスティヌスによれば、神は語ることに於いてみ言を生む。この生まれたみ言は生む神と一つである。この神はまた外に向かって語られる。「あれ」と語られることによって、天地万物は創られたのである。さて、言葉 (verbum) の問題は、具体的に語られることによって、言語の問題として展開する。人間は語る存在 (homo loquens) である故に、人間においても神の語りに似た働きがな

される。問題は類似と相違における両者の関係を明らかにすることである。

さて、本書はもともとザルツブルク大学に提出・受理された学位論文であって、その論文の題は「聖アウグスティヌスの三一論におけるレフェレンティア論」である。著者のまえがきによれば、著者は恩師パウス教授との討論を通じてアウグスティヌス哲学の言語学的構造の問題と取り組むようになったとのことである。

周知のように、アウグスティヌスはもともと修辞学の教師であった故に、言語の問題は回心以前から彼の関心事の一つであった。それは初期著作においては主要な問題であり、後期においても、言語に対する関心は変わらずに存続しアウグスティヌスの神学的・哲学的な思考を支えているのである。

アウグスティヌスによれば、すべてのしるしはものをさし示すことによって意味をもつ。しかし、この意味を知るためには、しるしがさし示す当のものが先に知られていなければならない。可感的なものは実物を見せることによって教えることができる。確かに、しるしそのものが事柄を示し真理を教えるということはできないが、内なる教師のある不思議な働きによって、教えたり学んだりすることが可能になるのである。

しかし、問題は三一の神を言葉で言い表したりそれによって三一の神を認識したりすることができるか、ということである。我々は気安く神の三一性を論じることはできない。三一の神は我々人間の認識能力を超えている故に、我々はむしろ沈黙し、我々の言葉で神を語るができないことを告白しなければならない。

それにもかかわらず、『三位一体論』はこの言表不可能なものを語ろうとする試みである。著者によれば、さし示すしるし（「三一」という言葉）とさし示されるもの（「三一」の神）の関係が問題である。両者の間には指示（Referenz）の関係がある。このReferenz という言葉こそ本書の中心をなすキー・タームなのである。

De doctrina christiana において、アウグスティヌスは既に「しるし」と「もの」の関係について深く考察しているが、『三位一体論』においては、「三一」（trinitas）という言葉とそれが referre しているものとの関係が正確に考察されねばならない。

第一部「『三位一体論』以前におけるアウグスティヌスの言語哲学的発展」において、著者は、アウグスティヌスが言語哲学的主題をどれ位取り上げているかを示そうとする。まず *De dialectica*, *De magistro*, *De doctrina christiana* が詳しく考察される。そこにおいて、しるしの概念、言語というしるしの機能、言語を構成する要素、言語の

意味伝達の価値、などについてのアウグスティヌスの考えが明らかにされる。そして言語に関するこれらの議論が『三位一体論』においてどのように用いられているかが明らかにされるのである。

第二部において、著者は『三位一体論』の内容を分析する。ここにおいて、言語の領域から取り出されたアナロギアの問題が注目される。このアナロギアの議論がああフェレンティアの問題にいかに関与するか——これが問題の核心なのである。

第二部において、著者は問題の所在を明らかにしたが、第三部においては、この問題が『三位一体論』第15巻に即して考察される。第三部第1章は「信仰の内容を理性によって明らかにしなければならないという必然性」についてであるが、まずAにおいて「神について語ることの問題性」が改めて確認される。神は「知らないことによってよりよく知られる方」であり、「言表しえない方」である。

しかし、それにもかかわらず、我々には神を知ることが許されているし、神を語らねばならない。そこで著者はBにおいて「『三位一体論』における障害突破の理由づけ」を論じる。我々は信じたことを理解するように求められている——これがその理由である。ここで大切なのは「歴史的な信仰」であり、その「信仰の知解」なのである。三一の神を語ることの必然性は、著者によれば、ただ哲学的にだけ基礎づけられうるのである。

著者は一体いかなる事態を述べようとしているのであろうか。ここにおいて、アナロギアの問題が出てくる。そこで著者は第2章において「内なる言葉」について詳しく考察する。まずAにおいて、『三位一体論』以前の時期における「内なる言葉」の問題が取り上げられる。ギリシア哲学において、*lógos proφορητός* と *lógos ενδιάθετος* の区別がたてられることがあった。「二つのロゴス」論に影響されつつ、アウグスティヌスは「vox—verbum」図式を神の言の受肉に用いた (*div. quaest. 83, fid. et symb., doct. christ.*)。更に、彼は倫理における *verbum intimum* の起源についても論じている (*in Rom. inch., de mend.*)。

次にBにおいて、著者は『三位一体論』における「内なる言葉」論を考察する。まず第8巻に即して、言い表されるべき対象の *phantasia* と *phantasma* としての言葉が取り上げられ、次に第9巻に即して、*amor* が内なる言葉の不可欠の構成要素であることが明らかにされる。更に、第15巻に即して、内なる言葉が形成される過程が詳しく

論じられる。まず、*cogitatio* が *locutio* であることと、心の言葉 (*verbum cordis*) が真であることが論じられる。次に、具体的に語られることがなくても内なる言葉が存在しうることが明らかにされ、更に、*cogitatio* と内なる言葉との関係が明らかにされるのである。

第3章において、著者はついに『三合一論』におけるレフェレンティア論』を取り上げている。そこで著者はまず *verbum dei* と *verbum mentis* の相違を明らかにする。両者のちがいをあげると、(a)外に現れる形の持続性のちがい、(b)2つの言葉の始原間のちがい、(c)内なる語りのあり方のちがい、(d)神の語りの永遠性と人間の語りの暫定性、である。

しかしそれら一切のちがいにもかかわらず、神の言葉と精神の言葉との間には重要な類似が存在する。(a)啓示性 (どちらも語ることによって表れる。) (b)*verbum* と *principium verbi* との間の等しい関係 (語るものと語られる言葉は等しい。両者の間に上下・優劣はない。) (c)*verbum veritas* (一見奇異にみえるが、言葉が語る人と等しいとするならば、内なる言葉は真理の場である。) (d) *Verbum operis initium* (言葉は働きへと展開する。) (e)*generatio* と *locutio* に関する類似 (神におけるみ言の誕生と人間の内における語りとは対応している)。

更に、著者は *amor* (あるいは *voluntas*) の構成要素について考察する。愛は *verbum intimum* と対象の認識を結ぶものであり、三一の神の内における聖霊に対応するのである。このようにして、三一のアナログアのアナログスとしての *verbum mentis* の三肢構造が明らかにされるのである。

著者は第4章において、「三一性についての思弁の言語哲学的意義とレフェレンティア論の妥当性」について論じる。まず、初めにのべた、三一の秘義は語りえない——しかし説き明かさねばならないということがもう一度確認される。次に、著者は精神のしるし性を取り上げる。アウグスティヌスによれば、人は神の形に似せて創られている故に、神に似たものとならねばならない。すなわち、魂は神を正確にさし示すしとならねばならないのである。

先に論じたように、*res-signum* 図式はある大きな困難を抱え込んでいた。すなわち、「ものはしるしによって教えられる」にもかかわらず、「ものを知らない」と、しるしの意味は分からない。しかし今や、内なる言葉の存在と働きが明らかにされている。

「もの・しるし」図式ではなく、「もの・さし示し・しるし」の三角形が取り出される。二つのものが無媒介に対立するのではなく、両者を橋渡しするものが現れたのである。ここに、内なる言葉の言語哲学的意義がある。アウグスティヌスによれば、内なる言葉は真理を認識しようとする働きであって、内面性に閉じ込める主観性ではない。真理を認識するために、memoria, intelligentia, voluntas は共働する、その結果、内なる言葉が生まれる。その限り、内なる言葉は三一構造をもつのである。

しかしその深く豊かな内面性にもかかわらず、否まきにその内面性の故に、内なる言葉は外へと向けられ、声によって具体的に語られることを求める。内なる言葉は意志伝達の領域におけるしるしを求め、vox によって具体的に指示・言及 (referre) されるのである。このようにして、『三位一体論』において、「内なる言葉」の意義が明らかにされ、vox significans の積極的な働きが認められることによって、res と signum は固く結び合わされるのである。

以上のように、本書の著者は『三位一体論』における言語哲学的問題の重要性を終始一貫して強調する。我々は更に res と内なる言葉との関係を掘り下げて考察する必要がある。

山田 晶著『トマス・アクィナスの《レス》研究』

創文社, 1986年, V+979頁

宮内久光

「存在とは何であるのか」とは問われても、「存在」(エンス)と同一であり可換的であるとされる「もの」(レス)について、「ものとは何であるのか」と問われることはきわめて稀である。敢てこの問題に真正面から取り組んだのがこの大著である。しかしトマスはレスを自明なものとして前提し、これを主題的に取り上げておらず、研究文献も皆無に近い。そこで自ら取られる方法も定まってくる。トマス自身のテキストの中でレスとの関係を有する重要な概念としてエッセンチアとカウサとラチオを選び、さらに